

## セーフコミュニティ推進自治体 首長インタビュー

## 青森県十和田市長 小山田 久 氏(2)

2025 年 1 月の任期満了をもって市長職をご勇退されることを表明された小山田久氏にこれまでの十和田市のセーフコミュニティのあゆみと成果についてお話をお伺いしました。

## 1. 前市長から引き継いだセーフコミュニティ

——行政のリーダーとして、先代市長の時に始まったセーフコミュニティ(以降、「SC」)についてどのように取組まれてきたのでしょうか。

私が市長に就任したのは 2009 年 1 月です。その時職員から説明を受けたのは、高齢者の事故、特に家庭での事故が多いということでした。実は、その 4 年ほど前から、当時健康福祉部長だった新井山洋子さん(現・とわだセーフコミュニティをみんなですすめ隊 顧問)を中心に、SC に関わる調査が行われていました。この調査により、新井山さんの熱い思いが現場に伝わり、十和田市が SC に取組むきっかけとなっていたのではないかと思います。



十和田市長 小山田 久 氏

この調査は、青森県立保健大学とともに、約 100 人の市民ボランティアが約 600 世帯を訪問して行われました。この調査により、市職員はもとより市民の皆さんが、「十和田市ではこんなに事故が多いんだ」、「これからますます高齢化が進んでいくなかで、市民が病院にかかるのも大変になるかもしれない」という実態が明らかになりました。

当時、私は、まだそのような実態については詳しくありませんでしたが、市長就任の翌月(2 月)に、新井山さんから十和田市では自殺がどれだけ多いか、そして高齢者に関わる事故やケガがどれだけ多いか、について説明を受けました。加えて、当時は人口 1 万人当たりの交通事故(が県内でトップだったということでした。

そして、「事故やケガを減らすための『予防』の取組みがあるから、ぜひ十和田市も SC を推進すべきとの説明を受け、(安全のための取組みは)他の自治体でも取組んでいることだけれど、SC のように科学的・理論的な根拠に基づいて行うことは良いことだと思いました。

そのような中、(前市長の時にすでに準備が進んでいた)認証に向けた現地審査が実施され、私も市長として認証の過程に立ち会いました。審査を通して、十和田市がこれまで何をしてきたのかを知り、「良いことをやってるんだ。これは(引き続き)やるべきだ」と思いました。

十和田市がSCに取り組むにあたっては、「子どもの安全」「高齢者の安全」「自殺予防」「交通事故予防」「防災」「暴力・虐待予防」「余暇活動の安全」「労働の安全」の8つの(対策)部会で、行政だけでなく市民や民間組織の方たちが一緒に取り組んでいます。市民が行政に「これをやってくれ、あれをやってくれ」と要望するものではありません。仕事として安全に関わる方もいますが、市民一人一人が「日常生活の中でまちの安全に取り組む」、そして「地域で一緒に取り組む」、その結果「安全なまち」になっていく。この手法は「まちづくり」に通用するものと感じました。こうしたことから、これまでSCを止めるということは一切考えたことはありませんでした。

——市長に初めて就任された際、「前市長がやっていたことだから止めてもいいのでは」といったご意見はありませんでしたか？日本でも、SCを推進している自治体の中には市長が替わると止めるところがありますが、どのようにしたらSCを(バイヤスなく)ご理解いただけるでしょう。

私の場合は、そういうご意見は聞いたことがありません。確かに、前市長がSCを始めるといふ決断をし、認証に向けて準備を進めてきた途中で替わったので、私がそこで「止める」と言えばそれまでだったかもしれません。しかし、やり方次第では、そんなにお金がかかるわけではなく、安全なまちづくりのためなので、私には止めるという考えはありませんでした。

——その背景には、すでに市民や民間組織の方たちが主体的にアクションを起こしていたという実績もあったのでしょうか？

そのとおりです。先ほどお話した市民ボランティアによる調査は、実施するだけでも大変なことです。当時の「セーフコミュニティとわだを実現させる会」というボランティアの方々が、多くの項目を調査してくださいました。そこには、新井山さんの本当に熱い思いがありました。その思いを聞いたら、だれもが「一緒にやろう！」という思いになるはずです。

——地域のキーパーソン、そして行政のリーダーがSCをどのように位置づけるか、方向づけるかが大切なのですね。

そうですね。“社会のため”、良いことをやっているのだから、十和田市も新しい市長が引き続きしっかりやってくれるはずです。

## 2. 4回の認証を通してみえる成果

——十和田市は、4回目の認証を取得されました。過日の現地審査での報告などをみると、着々と成果が出ていますね。

そのとおりです。一番成果が表れているのが交通事故でしょう。初めての認証当時から比べると現在は交通事故件数は3分の1になっています。取組み始めた時は、人口1万人当たりの事故件数が本当に多く、県内一でした。50件台の頃もあったように思いますが、現在は20件ぐらいいです(参考:2022年 18.9件)。

——十和田市の場合、地形や、基盤の目のように整備されている道路の形状も交通事故の発生に影響しますか？

そのとおりです。(特に市街地は)交差点が多いく、そこでの出会い頭の事故が多い状況です。全ての交差点に信号機が設置されているわけではないですし、もし全ての交差点に信号機があれば、車は(止まってばかりで)走れません。事故データを分析すると、交差点に加えてその周辺での事故も多いことがわかっています。このような地域の特徴を理解したうえでの対策が大切です。

## 3. 十和田市 SC と市民

——傾聴ボランティアのように、問題が深刻化する前に市民の方が対応してくださる取組みも十和田市のSCの特徴だと思います。

自殺死亡率については、交通事故ほど大きな数字の変化はないですが、それでも2割程度減っています。市民の方々は、個人で研修に参加するなど、よくやったださっています。

市としても、平成23年度から独自の事業として「市民活動支援事業」を打ち出しました。市民の方々による公益的な取組みを支援するために活動費を補助する事業です。自殺対策に関しては、この事業を活用しているグループが3つあります。

自殺に至る理由は非常に様々で、複雑とされています。例えば、お金のこと、病気のこと、その他様々な悩みや問題が関係しています。その一方で、対策のために必要な情報は限られています。警察が持っている情報でも教えてもらえない場合もあるし、家庭内でも知らないこともあります。ですが、様々な立場の方がチームとして取組めば、問題や課題を共有して対応することがで

きます。例えば、もし金銭的な悩みが関係していることがわかれば、市が、借り換え制度などを紹介することができます。

——行政に相談するのは敷居が高いという方にとっては、まずは市民の方々が寄り添って話を聞いてくださると心強いですね。

やはり、市職員が対応するのとボランティアの方が相談に乗るのは、違う面があると思います。だから、これらの取組みは成果が出ているのでしょう。しかし、短期間で取組みの成果が出るわけではないので継続が大切です。

——行政の事業は期限があるものも多いですが、SCは継続に価値を置いています。議会などで「もうそろそろいいのでは？」という話が出ることもあったのではないのでしょうか？

私は聞いたことはないですが、あるのかもしれません。5年ごとの認証なので、その前になると「では、(認証は)どうするか」という話になるのでしょうか。ただ、私は当然やるものだと思っていました。

ただ、毎年同じことをやっていると、取組む方としてはマンネリ化してしまいますので、少しずつでも変わっていかなければならないという気がします。例えば、対策部会は今のままでいいのか、お金のかけ方はどうか、メンバーをもっと幅広く、若い人にも入ってもらうにはどうすればいいか、など。認証も4回目を迎えましたし、今後は、そういうこと(継続していくための体制など)を考えないといけないと思います。

——成果が「見える化」されると、市民の方もSCのイメージがつかみやすくなりますね。

そういう意味で、1月に(亀岡市、松原市とともに)「国際安全都市」宣言をしました。これからは、SCで取組んでいる内容をより多くの市民の方たちに積極的に広報していかなければなりません。お金をかけなくてもPRはできるので、やり方も変えていかなければならないと思います。高校生にも、興味がある人が出てきていますから。

——高校生がSCに取り組んでいるのは、十和田市の特徴の一つです。

今まで高校生のような若者が取り組むことはなかったので、そういう(SCを継続することで幅広い世代が興味を示し活動を始めている)意味では十和田市は変わってきていると感じます。

—十和田市の SC は進化していると感じています。その一方で、「最初の認証は自分たちもがむしろに取組んだけれど、次第に（行政が様々なことを調えるようになり）距離を感じるようになった」、「市民が主体者としてもっと取組まないといけない」という思いをお持ちだともお伺いしました。

そのためにも、4 回目の認証を取得した今、取組みの在り方を再確認してしていくことが大切です。

## 4. 十和田市 SC の課題

——現在、十和田市 SC が抱える課題についてお聞かせください。

十和田市だけでないのですが、私たちを取り巻く状況は、SC を始めた当時から変わっています。少子高齢化が確実に進んでいます。SC に取組む方たちも歳を重ねています。その一方で、取組み自体は大きく変わっていません。良いことをやっているのですから、続けるための体制を見直していかなければならないという気がします。まずは、「SC に取組んだらこんなにまちが良くなったんだ」ということを、より多くの市民の方が実感することが必要でしょう。そうすれば次のステップが見えてくると思います。

また、十和田市の観光という特色を生かしていないといけないと思っています。コロナ禍を経て、観光客・インバウンドがようやく戻ってきています。「十和田市は、安全安心を宣言しているまち」ということを知っていただくことで、より安心してお越しいただけると思います。今後はそうした方々を受け入れるために何が必要なのかも併せて考えていくことが大切です。例えば、ちょっとしたケガなどであれば、すぐ救急箱が使える、といった環境が必要かもしれない。診療所はあるけれど週末は休診です。救急車は出動できますが、小さなケガであれば、救急車でなくても十分間に合うこともありますので。

## 5. 十和田市 SC の成果

——市長からみた SC の一番の成果、評価のポイントをお聞かせください。

市民主導による取組みが、(行政だけでは補いきれない部分をカバーし)様々な成果が出始めている点です。主なものでいえば、交通事故は大幅に減少し、自殺死亡率も2～3割減少しました。その他の取組みも、年によって増減はあるものの改善の方向に向かっています。本当にやった甲斐があったと思っています。市民を含め、取り組んだ方たちも同じ想いだと思っています。

——SC は、まちづくりには役立つと思いますか。

役立つと思います。一緒に取り組んでいるメンバーをみると、職業も様々ですし、所属も違います。このように(人口減少が進む中で)多くの方が関わり、チームとしてまちの課題に取り組んでいます。

その一方で、「組織」として継続して活動に関わっていても、(その組織の一員として)活動に携わっている方たちは歳を重ねていきます。今後は、若い方たちも加わっていただくことで、より多様な世代からの意見が取組みに活かされればよいと思います。

## 6. 活動の広がり

### 6-1. 若者世代へのアプローチ

——郡山市でSCの対策員会で委員をしていた十和田市出身の大学生のように、まちの安全、市民の安全に強い思いを持った若い方もいらっしゃいます。若者部会などができるといいですね。

高校生も含め、そういう若い方たちの意見を聞く機会を持った方がいいと思います。「SC だけのために集まってください」というのはなかなか厳しいと思うので、何かの機会にそういう「場」を設けるというのも一つの方法です。一回で終わりではなくて、繰り返してそういう「場」を設けると、関心をもつ方も出てくると思います。そういった次世代の方が加わる工夫をしていかなければ、継続するのも大変だと思います。



## 6-2. 「つながり」の継続と広がり

——コロナ禍を経て、「つながり」の修復が多くの自治体で共通した課題になっています。他自治体から「十和田市では、市外の方までSCに関わっているのはなぜ?」「どうやったらそのようなことができているの?」と質問が出ていました。

例えば、もともと仕事を通してSCに関わっていた方が、市外の職場に異動した後も十和田に通ってくれた方もいます。その方は、「転倒した時にケガをしないように、(家具などの)角に何か貼ろう」という風に、自分の職業を活かして参加してくれました。

このように専門性を持った方がメンバーにいれば、その知識や経験を提供できます。当初から、様々な立場の方々が「仲間」として関わってくれました。

——そういったいろんな方々が関わっておられる背景には、十和田市の取組みを知っていただける機会があるからでしょう?

そういう意味では、現在は情報発信が少し足りないですね。せっかく良いことをやっているのですから、もっと発信していかないとけない。しかも、取組みの結果が出ているのですから、なおさらです。対策部会のメンバーではないからSCに参加していないのではなく、同じ安全課題に取り組んでいるのであれば、広い意味ではSCに取り組んでいる、そういう視点でより多くの方にSCが伝わることを期待しています。

## 7. データの蓄積と活用

——十和田市には、取組み始めた時から収集しているデータの蓄積があります。

「何で、どのようにケガをしたのか」、「どこでケガをしたのか」という具体的なことが分からなければ、問題はなかなか解決できません。例えば、データを分析して「転倒したのは、大概是同じような場所だ」と分かれば、その場所の対策をすればよいのです。

私は、青森県の獣医師として、獣医関係の仕事で10年ほどやりました。そのとき、牛舎の中で転ぶ牛がいて、中には体が重いためケガをする牛もありました。それで、「どういう場所で」「どういうときに」事故が起きたのか、を調査



しました。すると、牛舎の中で歩いていて方向転換しなければならない「角」で滑る事例が多かったのです。それがわかれば、例えば「マットを敷く」というような対策ができます。SCもそれと同じだと思います。

現在は、16年前から蓄積した(市民の外傷)データがあるので、当時と比べて今はどうなっているのかを検証することはとても重要です。例えば、SCに着手した際に実施した調査で見えた「家の中で転倒してケガをして、病院に搬送された」という課題が今はどうなっているのかを確認していくことは大切です。

## 8. 今後の十和田市 SC への期待

——今後の十和田市の SC に期待していることをお聞かせください。

SCだからといって、特別なこと、極端なことはやらなくてもいいと思います。ですから、もっと市民の方に SC の取組みを広く伝えてもらいたい。そうすることによって、「自分たちもどこかで協力できる」、「それだったら我々もできる」といった人が現れてくると思います。実際に取組む方たち、若い方たちがもっとSCに取組んでくれればいいなあ、と思います。

現在は、8つの対策部会があるけれども、その部会ごとに見れば、「実は、こっちの方がいいんじゃないかな」という別のアプローチがあるかもしれないので、(部会の統合も含め)体制を見直してもいいと思います。

それから、(認証式典などでは)市議会議員の方々も出席しているので、まずは議会や委員会(これまでの成果について)報告し、アイデアや要望や意見を聞いてもらいたい。議員のなかには興味がある方もいるはずなので、「議員でもやるべきだ」ということになれば本当によいことです。

また、行政に関しては、まずは庁内の民生部や健康福祉部に「4回目の認証を経験し、今後の推進に向けて意見がないだろうか?」と聞いてほしいです。やり方によっては、そんなに費用はかからないのですから、SCで取り組んでいる内容を共有できれば、行政内でも SC による連携・協働の取組みはさらに広がっていくと思っています。

—— 本日、市長のお立場からSCの実績・課題・展望をお聞かせいただいたことは、他の自治体にとってもSCに関心を持っている方にとっても参考になります。ありがとうございました。

インタビュー実施年月日:2025年1月22日

実施場所:十和田市役所

執筆・編集:前田萌、白石陽子

最終校正:2025年3月19日